

先週のプリントで最後に載せた真っ黒写真は、ヘラクレイトスと言いながら、実はデモクリトスでした。お詫びをして、右に再度載せます。ヘラクレイトスは暗い人（性格が暗いのではなく、言うことがようわからんという意味）と言われていたので、あのようになったのだと開き直ってもいますが。



さて、「子供はみんな哲学者だ」という言葉があります。子供はよく「なんで、なんで」と聞くでしょう。哲学という学問は「なぜ」という問に最後まで答えていこうとするものなので、そういう言葉ができたのだと思います。子供がどの程度まで哲学者なのかは知りませんが、まず「なぜ」と不思議に思うことが哲学の出発点であることは、アリストテレスも「人は驚くことによって、哲学し始めた」と言っていることから確認できます。

でも「なぜ」と問うてからは、どうやって答えを探していくのでしょうか。それは回りの世界をよく観察しながら、です。そうして「この世界の目に見える現象の裏に何かがあるか、あるいはないのか、さらにもし何かがあるならば、それはどういうものか。また人間とは何か」などを問い続けるのです。ですから、哲学をするにはどうしても経験が必要で、それゆえまだ経験の乏しい子供が本当の哲学者になるのは難しいのです。これとは逆に、ほとんど経験を必要としない（それゆえ頭の中だけで考えられる）数学の場合、年少者でも天才数学者といわれる人ができることは珍しくありません。

ところで、この哲学のやり方に関して哲学の歴史上、大きな曲がり角があります。それは『回りの世界をよく観察する』というけれど、人間には外の世界をちゃんと把握する能力があるのか。まずそれを検討しないとイケんのじゃないか」という疑問が提出されたときに起こりました。そうして、その結果「本当は人間は外の世界を知ることができないのだ」という主張が幅をきかし始めたときです。



この主張は、ギリシア時代にソフィストという人たちによって言われたのですが、そのときはそれを反駁するソクラテス、プラトン、アリストテレスによって、消滅していきました。しかし、17世紀の初め、フランスのルネ・デカルト（1596~1650）という人（左の写真の人）が再びこの主張を全面に出すと、今度はこの原理が広く認められるようになり、それ以降の西洋の哲学の方向を変えてしまったのです。

前も言いましたように、哲学には結構「あいまいさ」があります。明快な証明ができないので、何でも言えるというような面があるのです。それゆえに、色んな哲学が乱立するという現象があります。現代は実に様々な哲学があり、そのことが哲学の評価を落としているのは間違いありません。

デカルトの時代、種々の哲学があり、またキリスト教も宗教改革の後で分裂していたので、「真理なんかあらへん。万一あったとしても誰にもわからへん。せやから、何事についても断定したらあかん」という懐疑主義（何事も断定せず、判断を停止する態度こそ、知恵者の態度だという考え）が広がっていました。この懐疑主義は、まさにギリシア時代にソフィストたちが主張したことですが、ソクラテスたちは、「だいたい『何事も断定してらあかん』と言うた瞬間、彼らは一つの断定をしているという矛盾におちいっとるやんか」と言って、懐疑主義を克服しました。しかし、西欧の近代の始まりの時期に懐疑主義は再び勢いを伸ばしていたのです。

デカルトは数学に優れた才能を持った人で、数学の明晰さに感動していました。それだけに哲学のあいまいさや多くの学派があることに。そこで、「どうして、数学には一つしかないのに、哲学には色ん

な異なる考えがあるのか。それは哲学の方法が悪いからざんす。数学と同じ方法を使って哲学をしたら、誰も反対できないような明晰なただ一つの哲学ができるはずざんす」と考えたのです。

では、数学の方法とはどんなものでしょうか。みんなの方がよく知っているでしょうが、まず誰もが認める（あるいは認めると約束する）公理を決めて、そこから、証明をされた定理を積み重ねて、どんどん真理を広げていく、というやり方ですよ。

これと同じようにしようと、デカルトはまず誰もが認める公理を探すことにしました。こうすることによって、彼は懐疑主義を克服しようとしたのです。そのため彼がとった方法がすべてを疑うというもの（方法的懐疑）でした。つまり、「全部疑うこと、そしていくら疑っても疑いきれないものがあるかどうか探そう」というわけです。こうして「目や鼻や耳や舌や触覚（これを五感という）が私に伝えてくれる像は、はたして本当の世界を伝えているのかどうかわからん。せやかて、目には錯覚などがあって、必ず正しく視覚できているかどうかわからないざんすから」と言って、五感を疑います。次に、今まで人から言い伝えられてきたこと、宗教や慣習の教えなども疑うことにしました。では、そうやってすべてを疑っていったら、どうなったか。彼は「それでも疑えないものを見つけた。それは『私が考えている』という事実ざんす」と結論したのです。これが、「我思う、ゆえに我あり（ラテン語で cogito, ergo sum）」という有名な言葉です。そうしてから、「頭の中で明晰で判明な考えのみが真理ざんす」として、どんどん真理を広げて、哲学の体系を打ち立てようとした。頭の中だけで物事を説明するのは非常に簡単で、彼はこの体系を作るのに4ヵ月しかかからなかったそうです。

でもその結論は、すぐにおかしいことが判明しました。しかし、その出発点である「哲学を数学のようにする」という考えには多くの方が魅了されたのです。つまり、頭の中で論理的に考えを進めて、この世界の有り様を説明するという仕方です。しかし、「頭の中で明晰で判明な考え」は、人によって異なることは容易に想像できるでしょう。案の定、デカルト以降、以前よりももっと奇抜で多様な哲学が生まれていきます。また、「哲学を数学のようにする」という考え自体に反対し、「頭の中の考えではなくて、感覚を通じて得られる一つ一つのデータ（経験）から哲学を始めるべきや」という考え（経験論という）も現れます。ということで、哲学の混乱は以前にも増してすごいことになってしまったのです。

この問題の根っこにあるのが、「人は果たして外の世界を知ることができるのか」という問題（認識論という）です。「知ることができへん」という人の論拠は、「五感の間違うことがある」という点です。この主張が確かであることは日常生活の経験からわかります。錯覚や空耳、ドライアイスに触れて「熱っ!」と感ずることなど。でも、アリストテレスは「そういう誤りがあるけれど、誤りは『偶然的』(by accident)で、五感はある対象を正しく捉える」と反論します。私もそう思います。だから、人間は普通誰でも目が見ていることを信じる。もし目が色を正しく把握できないのであれば、交差点で「信号は赤やけど、ひょっとして横の車の人は青と思っとるかも知れへん」と考え、怖くて青信号を通れない。あるいは自分の目の前にある床は「ひょっとして目が床と見せている物は、実はないのかも知れへん」と思ったら、怖くて一歩も踏み出せない。しかし、そんな心配で一歩も動けない人はいません。誰もが目や耳を信用して生きている。みんなも今までこんな疑いは考えたことすらなかったのではないのでしょうか。

人間が外界を知ることができるというのは、完全に知り尽くすこととは違います。けれど、外の世界を「こうだ、ああだ」と言うには十分な知識を得ることができるということです。この常識とも言えることを否定するなら、どうなるのでしょうか。それはこれから追々とお話しします。とりあえず、みんなには健全な常識をもって虚心坦懐に（素直な心で）世界を見て欲しいと頼んでおきます。